CHRONICLE OF BARSAC

バルサック戦記 2

片翼のリクと白銀のルーク

寺町朱穂
TERAMACHI AKEHO

ヴルスト・アステロイド
教官兼子守役として
リクの成長を
見守る狼型魔族。
死神
魂と引き換えに願いを叶える
という契約を持ちかける、
正体不明の美青年。
アスティ・
ゴルドベルク
リクの部隊に配属された
黒髪巨乳の牛型魔族で、
ござる口調の美少女。
ライモン・
バルサック
リクとルークの父親。
バルサック家当主として
王国と民の繁栄に
全てを捧げている。
リク・バルサック
異世界に転生した少女で、
ルークの双子の姉。
父親に捨てられるも魔王軍に
拾われ、自分を捨てた
退魔師一族への復讐に燃える。
ルーク・バルサック
異世界に転生した少年で、
リクの双子の弟。
前世の知識を駆使して
世界平和を実現するべく、
戦場へと赴く。
レーヴェン・アドラー
魔王一族に連なる
龍型の魔族。
リクの上司であり、
憧れの対象。
マリー
ルークに心酔し、
付き従う巨乳メイド。
主のために剣を握る。
主な
登場人物
MAIN CHARACTER

プロローグ

崖の向こうに広がる麦畑は、なかなか壮観だった。

風が吹くと麦穂は光りながらうねり、黄金色の海を波立たせる。その海の彼方には、白い衣をまとった山々が構えていた。ぽつり、ぽつりと点在する石造りの家屋。それ以外、地平線の果てまで遮るものはない。

「……綺麗だ」

ルーク・バルサックは口の端を上げた。自分の髪と同色――白銀の騎馬にまたがり、麦畑を眺める。このような風景は、今まで見たことがなかった。彼は前世の記憶を持っていたが、ごく一般的なサラリーマン家庭で育ち、大学に入学して間もなく命を落としたため、このような農村風景に馴染みがない。せいぜい、教科書の写真で眺めた程度である。だから、黄金色に輝く麦畑は、特に新鮮な印象を受けた。

「収穫が近いのかな？　たくさんの人がいるよ」

目を凝らせば、麦の隙間で動く人影が見える。背の曲がった老人から、まだ背丈の小さい子ども

まで忙しそうに働いていた。
「ねぇ、マリー。忙しそうだから、手伝いに行ってもいいかな？」
ルークは傍に控えるメイドに声をかけた。メイドのマリーは目を伏せたまま、静かに首を横に振る。
「若様、おやめください。若様は、この土地を統べる領主です。民に交じって働くなど、とんでもないことにございます」
「……分かってるよ。それに、素人の僕が行ったら、かえって邪魔になるだろうし」
そう返すと、再び麦畑に目を戻す。記憶を掘り起こしてみても、作物を育てた経験は皆無に等しい。せいぜい前世の小学生時代――それも、授業で植木鉢のトマトを育てた程度。とてもではないが、農業経験があるとは言い難い。この忙しい時期に初心者が手伝いに行ったとしても、足手まといになるだけだろう。
「だけど、無事に収穫できそうで良かった。他の畑も大丈夫かな？」
「報告では問題ないとのこと。ですので、若様が直々に視察へ向かう必要はありませんわ」
「直接、見て感じられるものもあるじゃないか。それに……他に、することないから」
最後の方になるにしたがい、言葉が徐々に小さく萎んでしまう。それを聞き、マリーはバツの悪そうな顔になった。

「……失礼しました、若様」
「いいんだよ、マリー。僕は、父の怒りを買ってしまったんだ。この謹慎は、当然のことなんだ」
ルークは退魔師の名門一族――バルサック家の跡取りとして、輝かしい未来を約束されていた。しかし、昨年末、せっかく捕らえた魔王代行シャルロッテ・デモンズを逃してしまったことが起因し、幼馴染みであるエリザベート・ブリュッセルの精鋭部隊を壊滅させてしまった。そのせいで、この数か月間、魔族との戦に馳せ参ずるどころか、王都のバルサック邸の敷居をまたぐことすら禁じられている。領地から出ることも許されなかったが、彼は別に不満を抱いてはいなかった。
「そう、当然の罰――むしろ、甘いくらいだ。だって、僕のせいで、セレスティーナが死んだんだ。クルミもレベッカも、ナタリーも!! みんな、僕が殺したようなものなんだ」
「そう自虐なさらないでくださいませ！ セレスティーナ様たちがお亡くなりになったことは、若様には関係ありません！」
「関係あるよ!!」
ルークは、思わず叫んでしまった。
「だって、みんな――」
しかし、その先の言葉は口にできなかった。
セレスティーナ、ナタリー、レベッカ、クルミ――彼女たちは、ルークのヒロインだった。

ヒロイン的存在ではなく、本当にヒロインなのだ。
彼は、この世界が前世で慣れ親しんだギャルゲーの世界だと知っている。マリーも含め、彼女たちは主人公のヒロインであり、その主人公に転生したのが自分なのだ。
ルークはゲームの知識を生かし、難なく攻略を進め、ついには敵対する魔王代行のシャルロッテまで落とす一歩手前までいった――のだが、どこで間違えてしまったのだろう。シャルロッテの攻略には失敗し、ヒロインが死ぬ予定もないところで、命を落としてしまっていた。それも、合計四人。これはもう、自分というイレギュラーのせいで、本来の物語から乖離し、起きてしまった災厄としか考えられない。
無論、選択肢を間違えたことはなかったが、ゲームとは違った行動――たとえば、前世の知識を生かして畑に腐葉土を混ぜたり、クルミに自衛してもらうため、独自開発の手榴弾を持たせたり――はしていた。その結果が、バタフライエフェクトを生んでしまい、彼女たちの死に繋がってしまった可能性は、十分にあり得る話だった。ただ――
「どこで間違えたんだろう？　一応、ゲームのストーリーに直接関係ないような行動しかしなかったはずなんだけどな」
「間違い？　ゲーム？　若様、なんのことですか？」
「いや、気にしなくていいよ……ん？」

ふと、馬の近づいてくる音が聞こえてきた。振り返ると、遠くに騎馬の一団がやって来るのが見えた。
「誰だろう？」
ルークは目を細める。やがて、彼らは目の前まで近づき静かに停止した。
「やっと見つけました、ルークお兄様！」
その先頭――栗毛の騎馬にまたがる十三歳前後の少女が晴れやかに笑った。艶やかな灰色の髪をツーサイドアップに纏め上げている。くりくりとした好奇心旺盛な瞳は、まるで小動物のようだった。
「お久しぶりです、お兄様！　覚えていらっしゃいますか？」
「君は……たしか、レクルール？　従妹のレクルール・キャンベルだっけ？」
「もう、気軽に『レク』とお呼びください、お兄様！」
レクルールは馬から降りると、走り寄ってきた。そのまま有無を言わさぬ速さでルークの腕を抱きしめると、まだ発展途上の形の良い胸を押し付けながら、うっとりと見上げてくる。
「れ、レクルール？　ちょっと離れて」
ルークは耳朶まで赤く染めながら、彼女の手を離そうとする。もし、彼女がゲームのヒロインであれば「ラッキー、イベント突入だぜ！」と思えたのだろうが、レクルール・キャンベルはヒロイ

ンどころか、ゲームに登場しない人物だ。完全なイレギュラーから寄せられる好意に、ルークはたじたじになってしまっていた。
レクルールから距離を取ろうとしても、女の子を乱暴に突き放すわけにはいかず、かといって、このままにしておくわけにもいかない。なにしろ、彼女はルークの従妹であり、まだ十三歳になったばかりの妹分。日本人として生きた記憶があるせいか、十三歳の娘に手を出すのは抵抗があった。
「レクルール様!!」
ルークのそんな態度を見るに見かねたのだろう。マリーが声を荒らげ、彼女を糾弾する。マリーは成熟しきった豊満な胸を見せつけるように、一歩、また一歩とレクルールとの距離を詰めてきた。
「なにをしていらっしゃるのですか。いますぐ、若様から離れなさい」
「いやっ！　お兄様と会うのは、二年ぶりなんですから、離れません！　それにしても、すばらしいですわ、ルークお兄様！　ここから山の裾野まで、お兄様の領地なのですね！」
彼女はマリーの糾弾に耳を傾けることなく、ルークに語りかけてくる。
「まぁ……そうだよ、レクルール」
ルークはマリーが頬を膨らます姿を横目に見ながら、少し困ったように笑いかけた。
「それより、その……お兄様って呼び方はやめてくれないかな？」
上目遣い、そして、脳が蕩けるような優しく甘い声で「ルークお兄様」と呼ばれるたびに、心臓

が激しく脈打っている。危ない。非常に危ない。このままでは、理性の箍が外れてしまいそうだ。
すると、レクルールは一瞬、寂し気にうなだれたが、ルークの心情を理解したのだろうか、すぐに、花が咲いたような笑みを浮かべた。
「そうですか……分かりました。では、これからは、ルークお兄ちゃんと――」
「いや、いやいやいや、それは、もっと駄目！　呼び捨てで構わないって、呼び捨てで！　だって、僕たちは従兄妹じゃ――」

「いや、ルーク。今日から二人は兄妹だ」

冷徹な声が聞こえた。
爪先から頭の上まで、すぅっと血の気が引いていくのが分かる。声の方へ顔を向ければ、すべてを凍てつかせるような双眸が、ルークを見下していた。蛇に睨まれた蛙とは、まさにこのことを指すのかもしれない。威圧感のあまり、ルークは逃げ出したくなる衝動に駆られた。
だがしかし、ここで逃げ出すわけにはいかない。ルークは呼吸を落ち着かせると、その男と向き合った。
「父上、いつからそこに？」

「いま到着したばかりだよ。久しぶりだね、ルーク」
ルークの父――バルサック家当主ライモン・バルサックは、不敵な笑みを浮かべた。
「マリー、レクルール。君たちは席をはずしてくれないかな？　ルークと今後の――大切な話をしたいんだ」
ライモンが告げると、マリーたちは一瞬、不満そうな顔をする。だが、バルサック家の当主でもある彼に逆らえるわけがない。彼女たちは、渋々といった様子で従った。
「なんのつもりですか、父上？」
ルークはライモンの真意を測りかねていた。少なくとも、ルークの知る限り、このようなイベントは発生しない。ルークの兄弟は、双子の姉だけだ。その姉も約十年前に死んだ。なぜ、このタイミングでレクルールを養子に迎え入れるのか、彼にはさっぱり分からなかった。
ルークがそのことを尋ねてみると、ライモンは「あぁ」と小さく頷いた。
「そうだね。彼女を養子に迎え入れたのは、万が一のことを考えて、ということかな」
「万が一のこと？」
「たとえば、ルーク……君が命を落とした時、このままだと跡取りがいなくなるじゃないか」
ライモンの声は優しかった。だが、目は凍りついたままだった。ルークの背中に嫌な汗が流れる。
「……つまり、レクルールを養子にしたのは、僕が死ぬ前提で、ということですか？」

ルークは歯を食いしばる。ライモンは、「バルサック家に利益がない」と分かった時点で、即座に人を切り捨てる。長年、彼に仕えてきた重鎮や実の娘さえ――
「もちろん、君が死ぬことは望んでいない。でも、万が一、ということがあるだろ？　最近、魔王軍が急激に強くなったらしいしね」
「……」
「だから、君には次の戦の指揮を任せたい。バルサック家の次期当主として」
ライモンはそう言いながら、耳に手を伸ばした。彼の耳には青い耳飾りが光っている。その耳飾りこそ、バルサック家当主の証だ。
「これを君に預けるよ。次期当主として、ふさわしい働きをしてくれ」
「父上、しかし!!」
「戦場で君が死んだら、これもなくなってしまうけど、構わないよ。これはただの物。作り直せばいいだけだからね」
ライモンは耳飾りをルークの手に握らせる。冷たい石の存在を掌に感じつつ、ルークが困惑していると、ライモンは彼の手を強く握りしめたまま「ただね――」と耳元で囁き始めた。
「もちろん、作り直すのには金がかかる。まぁ、その金は問題ない。死んだのは、君の不始末だ。君の財産で支払ってもらおう」

「……財産、ですか？」
「そう。君の持っているものすべてを使えば、新たな耳飾り代は簡単に捻出できる。金、領地、そして、君が囲う女たちを使えば、ね」
「――ッ!?」
最後の一言を耳にした瞬間、ルークの脳天に雷で撃たれたような衝撃が奔った。これ以上ないくらい目を見開き、ライモンを凝視する。彼の表情は先程までと何も変わらない。彼は本気だ。ルークが失敗したら、迷うことなく、彼が存在したすべての証を抹消し、なにごともなかったかのようにレクルールを当主に据える。そのすべてを、瞬き一つすることなく、平然とこなして見せるのだろう。
いや、自分が存在した証が消されるのは――嫌だが、構わない。問題なのは、自分を慕う女たちまで酷い目にあうということだった。
「どうしてだ、父上!?」
ルークは衝動的にライモンの胸ぐらをつかんでいた。
「金や領地は仕方ない。だって、それは、僕に与えられたものだから。だけど、彼女たちには、なにも落ち度は――!?」
「安心しなさい、ルーク。君が、負けなければ良いだけなんだから」

ライモンは、愕然とするルークの肩を叩いた。
「兵や武具は、君の希望に応じて用意しよう。バルサックは全面的に君を支援する」
だけど、それはルーク・バルサックが「使える退魔師」だと認められている間だけだ。この戦で負けた瞬間、その支援は全面的に失われる。それどころか、彼のすべてが奪われ、周りの人間にも被害が及ぶ。ルークは震えを押し込めるように、拳を強く握り直した。
「分かりました、父上。それで、どこを攻めれば良いのですか？」
「あぁ、場所は決まってる」
そして、彼がこれから赴く戦場の名を告げる。
その戦場の名は――

「カルカタ？」
少女は、興味なさげに繰り返す。
そこは、血風が吹き抜ける荒野。屍を喰う鳥が舞い、土地は赤く染まっていた。その中心に、彼女は佇んでいる。血と同じ色の髪を左手で触り、右手にはハルバートを握りしめていた。
「それ、どこ？　私、ここの防衛を頼まれているんだけど」
つまらなそうに呟くと、赤髪の少女は屍の山にハルバートを突き刺した。

――途端、悲鳴が周囲に木霊する。どうやら、そこに伏兵が隠れていたらしい。
そのままハルバートを持ち上げてみれば、切っ先には退魔師が刺さっていた。見事、心臓を一突きした結果、陸に打ち上げられた魚のような痙攣を繰り返している。両手は力なく垂らされ、少女になされるがままだった。おそらく、もって数秒足らずの命だろう。
「ここ、主戦場。人間殺しの最前線。他にも魔族の部隊はいるじゃない」
少女は串刺しにした退魔師には一瞥もくれず、ただ淡々と前だけを見つめていた。まだ隠れている敵がいないか見極めているらしい。その姿は、まるで森で獲物を探す狩人のように研ぎ澄まされていた。
「おいおい、これは魔王代行様の命令だぞ？　無視していいのか、嬢ちゃん？」
彼女の背中に、一人の魔族が軽い口調で問いかける。狼顔の魔族だ。少女の身体の内側から滲み出る殺気に臆することなく、飄々とした様子で剣を肩にかけていた。
「魔王代行って、シャルロッテでしょ？　あの恋愛脳の」
「たとえそうだとしても、魔王様が封印されている以上、シャルロッテ様が魔王軍の頂点だ。だから、敬称くらいつけろって。不敬罪で処罰されるぞ？」
「私、あんな女に従うつもりはないわ」
少女は燻り始めた苛立ちをぶつけるように、痙攣もしなくなった肉塊を投げ捨てる。どさり、と

足元に落ちた屍を躊躇いもなく踏みつけた。真紅の足で何度も、何度も、踏みつける。そのたびに血や臓物、糞尿が溢れ出たが、この戦場では別段珍しいものではない。ここに限らず、少し視野を広げれば、そこかしこに転がり落ちているありふれた汚物である。
「退魔師に――それも、ルーク・バルサックなんかに尻尾を振る雌に従うなんて、考えるだけで、吐き気が、込み上げてくる」
少女は屍に追い打ちをかけるように、何度も何度もハルバートを振り下ろす。その都度、血飛沫があたりを舞った。
「私たちは龍鬼隊。命令を出すのは、レーヴェン隊長のみ。分かってるの、ヴルスト？」
「いや、今の俺たちはゴルトベルク師団所属だから」
「これは一時的な移籍。あと数か月で戻れるでしょ」
「そりゃ――……まぁ、いいか」
ヴルストと呼ばれた狼型魔族は言い返そうと口を開いたが、少女の真剣な横顔を見ると、諦めたように息を吐いた。
「だけどな、そのレーヴェン隊長直属の上官がシャルロッテ様だ。その頼みを断ってみろ。隊長に迷惑がかかるじゃねぇか？　それに、俺たちの後釜は決まってる。そいつとの引継ぎが終了次第、カルカタに出発しろとの命令だ」

「……レーヴェン隊長に迷惑がかかるなら、仕方ないわ」
軽い舌打ちをすると、少女は屍の山に背を向けた。血のしみ込んだ地面を力強く踏みしめながら、本陣へと歩を進める。
「それで、カルカタってどこ？」
「んだよ、嬢ちゃん。カルカタも知らねぇの？」
「口を慎みなさい、ヴルスト・アステロイド少尉。私の階級は少佐よ。貴方の理屈だと、上官の私に軽口をたたくのは不敬になるんじゃないかしら？」
「あのなぁ、俺、アンタの教官で子守役だってこと忘れてねぇか？　――って、そんな怖い目で睨むなよ。はいはい、了解しましたよ、リク少佐殿！」
ヴルストは疲れたように肩を落とすと、リクに紙を差し出した。彼女は仏頂面で受け取ると、乱暴にそれを開く。紙には最前線からカルカタまでの地図が記されていた。
「カルカタは数百年前、人間から勝ち取った城塞都市だ。何度か人間に攻められているが、そのたびに根気強く撃退してきたらしい」
「それだけの力がある都市なら、私は必要ないでしょ」
「それだけ、攻めてくる敵が強いってことじゃねぇの？」
「まぁ、敵が強いならそれに越したことはないわ。すぐに出発の準備を整えるわよ」

カルカタを攻める敵の思惑には興味がない。
自分は上からの命令通り、無事にカルカタを退魔師の手から守り抜こう。
これは、自分が強くなるための戦いであり、出世して命を救ってくれた恩人――レーヴェン・アドラー中将の隣にいるために必要不可欠な道だ。故に、すべての敵を殲滅する。
それが、最前線であれ、カルカタなる城塞都市であれ同じこと。
リクの目には、目の前の戦いしか見えていなかった。

そして彼女――リク・バルサックは、まだ知らない。
カルカタへ進軍する退魔師の将が、血を分けた双子の弟であり、自分を見捨てた復讐対象――ルーク・バルサックだということを。

まだ、知らない。

第一話　城塞都市

カルカタは、目を奪われるほどに美しい城塞都市だ。
小高い丘の上にたたずむ小さな城は、巨大な城壁に護られている。王都の城やデルフォイの神殿のような洗練された美しさはない。しかし、形の異なる石を積み上げて造られた城壁は歴史を感じさせ、質素ながらも深い味わいを滲ませていた。

そんなカルカタ城の会議室で、軍議が開かれようとしていた。
カルカタを統治する領主――クラウト・ザワーを始めとしたカルカタの首脳陣、そして、最前線より派遣されたリク・バルサックとその部下、ヴルスト・アステロイドが机を囲んでいる。
「ごほん、それでは始めるか」
クラウト・ザワーは咳払いと共に話を始めた。
彼はヴルストと同じ犬系の魔族だったが、筋肉は少なく、灰色の毛並みの下には、骨が浮かんでいた。戦闘に不向きであることは一目瞭然ではあったが、長年、この街を統治してきた結果だろう。

どことなく、落ち着いた態度と貫録を感じさせた。
「すでに聞いていると思うが、このカルカタに退魔師軍が押し寄せてきている。その数は、およそ二万強。援軍に来られたバルサック少佐の軍勢、約二千騎を足しても、我らは一万に届くか届かないかだ」
「っく、なぜ……なぜ、もっと援軍を寄越してくれなかったのだ!!」
クラウトの隣に座っていた男が嘆いた。拳で机を叩き、怒りを発散させている。
「しかも、送られてきたのは人間の小娘!!　上層部は何を考えて――!」
「口を慎め！　援軍に来てくださったのに、失礼ではないか！」
クラウトの叱責に、リクは少し驚いてしまった。
リク・バルサックは人間だ。
しかも、退魔師の名門――バルサック家の直系筋である。リク自身は「退魔術を使えないから」「赤髪が気持ち悪いから」などという理由だけで切り捨てられた実家に対し、恨みや復讐心こそ覚えども、愛着など欠片も感じない。だが、魔族の中には「破門は演技であり、本当はバルサックのスパイなのではないか？」という声も上がっている。
故に、初めての場所では忌避されることを予見して来たわけだが、まさか領主が厚意的だとは想定外だった。ほんの少し眉を上げて、クラウトの次の行動を注視する。彼の眼は、暴言を吐いた男

にまっすぐ向けられていた。
「彼女こそ、ミューズの戦で退魔師軍を追い返し、ゴルトベルク中将の命を救っただけでなく、デルフォイではシャルロッテ魔王代行様の命を守り切り、今も最前線で活躍している――いわば、現時点の魔王軍、最高戦力だ」
彼は一字一句、躊躇うことなく言い放つ。
「分かったか？」
「っく、分かりました……ザワー様」
男は口を閉ざすと、悔しげに目を落とした。男が黙り込んだのを見届けると、クラウトは再び口を開く。
「とはいえ、兵力の差は圧倒的だ。ここで選ぶ方法は、籠城戦しかないだろう」
「籠城戦？」
リクは眉を微かに寄せる。
「問題あるか、バルサック少佐？」
「じわりじわりと死んでいくつもりですか？　待ったって、これ以上の援軍は来ませんよ」
リクは一歩、前に出る。クラウトは自分を評価してくれた。それに対して良く思っていたが、それとこれとは話が別である。

籠城戦は相手との根競べだ。籠城戦で勝つためには、相手の戦意を喪失させること。少なくとも、相手と互角の兵力があることが大切だ。兵力差が三倍になると、城を攻め落とされる危険性が高まる。今回の場合、魔族側が一万弱に対し、退魔師側は三倍とまではいわないが、倍以上はいる。
さらに、今回の場合――最前線から、わざわざリクが呼び戻された。つまり、それだけ士気が高く危険度の高い相手が攻めてくるということになる。
「城に閉じこもって、敵が引き下がるのを待つ？　何年かかるか理解していますか？」
「食料の備蓄は十分だ。これだけあれば、あと五年は戦える」
クラウトが手で合図をすると、先程の男が資料を提示した。
それを一瞥したリクは、鼻を鳴らしてしまった。それは、領内からかき集めた食料の管理について記された資料だった。穀物、野菜、家畜――そのすべてが、ざっと見積もって、たしかに五年分ほど備蓄されていた。
「……驚いた。最初っから負け腰じゃない」
「これは必要な備えだ。一度、戦が始まれば、食料の新規調達は難しいからな」
搬入路がしっかりしていたとしても、有事の際に食料は限られてしまう。
故に、少しでも多く備蓄しておく必要がある。リクもそれは理解していたが、どうもそれとは違う気がしていた。証拠のない直感に過ぎないが、クラウト側に勝つ意気込みを感じられないのだ。

籠城していれば、いつかは敵が帰ってくれるだろうと甘く考えているようにも思える。
正面からそれを指摘してやろうか、とも考えたが、それはあまりにも短絡的だろう。リクは大きく深呼吸をした。
「籠城戦は最後の手段だと、私は学びました。それに、今回の場合、そうやすやすと帰る敵とは思えません……今はいかにして敵の数を削ぐか、ということを考えるべきなのでは？」
「無論、その通りだ。指摘されるまでもない。して、貴官に何か案はあるのか？　わずか一万の兵を使い捨てにせず、二万を超す大軍勢を倒す方法を！」
「ただいま思案中です。しかし――」
「ならば、あとは我らが策を練ろう。貴官らは下がって、次の命を待つが良い」
しっしっと虫でも払うかのように、リクたちを下がらせる。せっかく、クラウトに対して好印象を持っていたのに、台無しである。彼女の実績を評価しているが、あまり自分の作戦に口出しされたくないのだろう。もしかしたら、自分より目立った功を立てられることを恐れているのかもしれない。
「……分かりました。退出させていただきます」
「うむ。自室で待機していろ」
先程クラウトが黙らせた男は、「いい気味だ」と言わんばかりの下品な笑みを隠そうともしていない。リクは奥歯を噛みしめると、マントを翻しながら退出した。後ろで会議室の重たい扉が閉まる音が聞こえる。
「まったく、呼んでおいてお払い箱とはどういうことだよ！」
ヴルストは扉に向かって唾を吐いた。
「声、大きい。聞こえるわよ、あいつらに」
「聞こえるように言ってるんだっての！　……ったく、籠城戦で勝った実績があるからって、偉そうにしやがって」
ヴルストは吐き捨てるように呟いた。
「籠城戦で勝った？」
リクは歩む速度を落とすと、ヴルストに顔を向けた。
「それ、どういうこと？」
「おい、嬢ちゃんはカルカタの伝説を知らねぇのか？　……って、嬢ちゃんは人間だったな」
すっかり忘れていた、とでも言いたげな表情を浮かべているヴルストを、リクは軽く睨んだ。
「魔族の中では有名な話なの？」
「まぁな。カルカタは数百年前、奪い返そうと退魔師が攻めてきたことがあったんだよ」
ヴルストは顔を天井に向けながら、昔話のように語り始めた。

「俺ら魔族側がカルカタを手中に収めた後、退魔師がな、『雪辱戦だ！』って、それこそ皆殺しにする勢いで攻めてきた。だけど、戦が終わったばかりで、カルカタの兵士が足りなかったんだ。で、仕方ないんで、籠城戦で耐えることを決めた。魔族側はそれから三年間、ここに立てこもったんだよ」
「三年も？」
リクは目を見開いてしまった。
三年――記録として見れば、あっという間だ。
しかし、体感するとなると結構長い。三年間、ずっと籠城という名の責め苦を受けていたのだ。井戸はあり、食料をある程度溜めこんでいたとしても、それでも日に日に戦いは厳しさを増したはずだ。よく心折れることなく三年間も戦い抜いたな、とリクは感心してしまった。
「ああ。それでだな、さすがに、こんなに長く戦が続くとは思ってなかったもんで、互いに食料もつきかけていたんだと。そんな時、カルカタの領主がな、残された貴重な食料を一匹の豚に食わせたのさ」
「肥えさせて食べるため？」
リクが問うと、ヴルストは首を横に振った。
「いいや。その肥えさせた豚を、あろうことか城の外に放り出したんだ」
残りわずかになった貴重な食料を与え、肥え太らせた豚は食べられることなく、城壁の外に放り

出された。それを見た退魔師たちは、一斉に震えあがったという。
「『まだ、これほどの食料があるのか⁉』って驚いた退魔師連中は、すごすごと軍を引き揚げたのさ。奴らも戦続きで疲弊していたんだろうよ」
「なるほどね」
リクは腕を組んだ。
一度その方法で勝利したならば、籠城戦という安易な考えに飛びついてしまうのも納得である。他の手をろくに考えることなく、正面切って戦うことを放棄しているのには理由があったのだ。
「馬鹿な連中。それじゃあ、私は年単位で帰れないじゃない」
籠城戦なんて、気の遠くなるような戦をするわけにはいかない。
しかしながら、上層部は籠城戦をする気に溢れている。どうにかして敵が到着する前に、自軍を有利にする策を練る必要があった。リクは唇を噛みしめた。
「すぐに作戦会議をするわ。ヴルスト、一時間以内に小隊長を全員集めることできる？」
「了解っと！」
「頼んだわよ――ん？」
ヴルストが駆け足で廊下の向こう側に消えたのと入れ替わりに、二人の影がリクの前に姿を見せた。一人は良く知っている部下――地味な顔立ちに兎の長い耳が特徴的な伝令兵、ロップ・ネザー

ランド曹長だ。
しかし、彼の後ろにいる魔族には見覚えがなかった。瞳をらんらんと輝かせ、リクに熱い視線を向けている。年齢は、リクよりも上だろう。階級章は少尉。顔立ちは整っていて、流れるような黒髪はまったく傷んでいない。何よりも特徴的な箇所は、彼女の胸である。鎧を纏ってもなお、その巨大さは隠せない。
リクは「剣を振るう時、邪魔になりそうだ」と感じた。
「ロップ、そちらは？」
「は、はい！　リク少佐、こちらは――」
「この度、バルサック小隊に配属になることが決定いたしました、アスティ・ゴルトベルク少尉でござる！　リク・バルサック少佐に挨拶に参った。以後、よろしくお願い申す」
アスティ・ゴルトベルクと名乗った彼女はロップを押しのけ、リクの前に立つ。そして、大輪の花のような笑みを浮かべ、嬉しそうに敬礼した。
「……そう、足手まといにならないよう精進なさい」
「はっ！　心得ましたでござる！」
アスティは清々しい表情のまま、すぐに頭を下げた。黒髪が垂れ、その隙間から小さな二本の角を覗かせる。

それを見た時、とある魔族がリクの脳裏に浮かんだ。彼女は眉をひそめ、アスティの角を凝視する。立派な二本の角、そして家名がゴルトベルク。そこから導き出される答えは一つ――

「その角……もしかして、貴方はゴルトベルク中将の血縁者？」

「はい！　拙者はルドガー・ゴルトベルク中将の孫でござる」

アスティは顔を上げ、誇らしげに胸を張った。

「おじいちゃん……えっと、祖父殿から、バルサック少佐の話を聞いているでござるよ！　将来有望な新鋭兵で、祖父殿の御命を守ってくださったんでござるよな？　本当に、なんとお礼を申し上げたら良いか！」

「別に礼はいらないわ。上官を守るのは部下の仕事でしょ？」

「もちろんでござる！　しかし、それを実践に移せる兵は滅多にいないでござる！　それから、そうそう！　祖父殿から聞いた少佐殿の活躍でござるが――」

アスティは楽しそうに話し始める。リクは彼女を軽く一瞥すると、再び歩み始めた。

新しい部下の実力は未知数だ。しかし、曲がりなりにもゴルトベルクの孫娘。少尉になったことを考慮すれば、相応の実力の持ち主であるのだろう。いずれにしろ、使える部下は多い方が良い。

リクは肩を落とすと、傍らに付き従うもう一人の部下に視線を向けた。

「それで、ロップ。他に報告は？」

「あ、はい！　ここに進攻中の軍についての報告書が届きました」

ですが……と、ロップは言い淀む。なにかを躊躇うように目を伏せていた。

「どうしたの、早く言いなさい」

「は、はい。それが――」

もごもごと耳打ちするように、ロップは退魔師軍を率いる将の名を告げる。

その名前を聞いた瞬間、リクは目玉が零れ落ちんばかりに両目を見開いた。先程までの鬱憤がすべて吹き飛ばされ、愕然とした表情を浮かべる。

「それ、本当？」

感情を抑え込み、静かに尋ねる。ロップは無言で頷いた。そして、申し訳なさそうに長い耳を垂らしながら、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「はい。えっと、その……敵とはいえ、少佐の身内ですから、心中、お察します」

「そうね、まさか、こんなに早く巡り合えるとは思わなかったわ」

退魔師軍その数、二万強。率いる将はバルサック家次期当主、「白銀」のルーク・バルサック。千年に一度の鬼才と称される天才退魔師であり、リク・バルサックの双子の片割れだ。そんな彼が、敵として立ち塞がる。なんて運命なのだろう。

「ありがとう、ロップ。知らせてくれて」

リクは自分の笑みを抑えきれなくなっていた。口が裂けるほど口角を上げ、瞳には狂気を輝かせている。
あれから、十年。
姉が父親に捨てられる様子を横目で見ながら、助けようともしなかったあの弟が。皆に「役立たず」と罵られ、いじめられているリクを傍観しているだけだった、あの薄情な片割れが、軍勢を率いて現れる。
ずっと、ずっとずっと、この胸の内に育ててきた怪物を解き放つ時が、ついに来たのだ。
「ロップ、ヴルストに伝えてきて。会議、開始時間を十五分早めるって。すぐに対策を立てなくっちゃ」
歓喜のあまり声が震えた。心なしか歩調が軽くなっていく。
「待ってなさい、ルーク・バルサック。死ぬよりも恐ろしい殺し方をしてあげるから」

第二話　籠城か出撃か

カルカタに、戦の足音が近づいてくる。

偵察に向かった兵によると、その数は以前の報告と変わらず。今日にでも、カルカタの麓まで押し寄せてくるだろうとのことだった。無事、戦支度は着々と進められている。カルカタの士気も高く、誰もが勝ち戦になると信じて疑わなかった。
「……籠城戦の、だけどね」
リクは、会議室の窓に視線を向けた。窓の向こうには、新築された豚小屋がそびえたっている。城内の一般市民も商人も不安げな顔をしているが、籠城戦に対する意気込みは高く勝利を疑っていないことが、リクには不思議でたまらなかった。
最初、会議室を訪れてから、すでに一週間。
何度も「籠城戦は最後の手段であり、まずは攻める方法を考えるのが得策」だと進言したが、一度も聞き入れてもらえず、この日を迎えていた。
クラウト・ザワーを中心としたカルカタ首脳陣は、今日も会議室で額を合わせている。それぞれ、顔に緊張の色が浮かんでいるが、どこか余裕のようなものが見え隠れしていた。
「そろそろよな、奴らが攻めてくるのは」
「はっ、いつでも準備は整っております」
「五年でも、十年でも耐えてみせましょうぞ」
会議は家畜の餌代について盛り上がっている。住民の食料を切り詰めてまで、家畜にまわす。そ

れも、数年後の勝利をつかみとるために。
リクの心に不快な感情が膨らむ。その時だった。
「嬢ちゃん、そんな陰気な顔するなって」
ヴルストが、ぽんっと肩を叩いてきた。どうやら考えていることが、すべて表情に出ていたらしい。リクは彼を少し睨んだ。
「この状況、あいつらの立てた作戦で籠城なんて、負けることを先延ばしにするだけじゃない。まったく、あいつら……馬鹿なのかしら？」
声を潜め、文句を囁く。幸い、首脳陣は議論に熱中している。末席の内緒話など聞こえるわけがなかった。
「まっ、派手に暴れることだけが戦じゃねぇよ。それに、退魔師の戦いの隙を叩けばいいだろ？」
「隙を見せる敵じゃないわ、あいつは」
リクは机に両肘をつき、指を絡ませた。ルーク・バルサックの思考は単純だ。可愛らしい女、もしくは美女を第一に考え、彼女たちのために行動する。その悪癖のせいで、リクは何度となく損害を被った。明らかにリクが正しいのに、ルークは美女の言葉を信じ、「リクが悪い」と糾弾し、リクに罰を与えた。食事抜き、廊下一帯の掃除、荷物持ち、雑用などなど……思い出すだけで腸が煮えくり返ってくるが、それは私生活でのこと。

戦場に出れば、一騎当千の働きをする武者である。
ここ数年の戦績は目を見張るものであり、確実に勝利を収めていた。復讐のままに奔れば打ち取られるのは目に見えており、慎重に倒さなければならないことは明白だ。そんな強敵に、籠城戦などという最初から負け腰の作戦が通用するとは、到底思えなかった。
「っていうか、嬢ちゃん。身だしなみくらい整えろよ」
ヴルストが爪先で軽くリクの頭を小突いた。
「なによ、ちゃんと纏めてるじゃない」
自慢の赤髪を触りながら、少し頬を膨らませる。人間魔族問わず、赤髪は忌避の対象だが、敬愛する隊長に褒められた大切な宝物だ。一日も手入れは欠かしていない。それを言えば、彼は大げさに息を吐いた。
「バーカ、纏めればいいってもんじゃないっての。ここもそこも妙な方向にはねてるし。第一、纏め方にもいろいろあってだな……っておい、手鏡持ってないのか？」
「そんなの戦場で必要ないじゃない」
その返答に、彼は心底呆れ果てた、とばかりに口を開ける。そして、なにか言おうとした——そんな時だった。
「ほ、報告いたします!!」

金切り声と共に会議室の扉が一気に開かれ、ロップが転がり込むように入ってくる。リクはロップに駆け寄った。彼の焦り具合を見る限り、十中八九、悪い知らせなのだろうが、敵が攻めてくる音は聞こえない。耳を澄ませてみたが、城門の方は静かで、とてもではないが戦が始まったようには思えなかった。

「どうしたの、曹長？」

リクが尋ねると、ロップは声を震わせながら答えた。

「て、敵が……退魔師の軍勢は、こちらには来ません。カルカタを素通りし、そのまま山の方へと進軍しています」

「な、なんだって⁉」

ヴルストの叫び声が会議室を震わせた。ヴルストだけでなく、これには報告を聞いていた誰もが驚きの声を上げている。クラウトも目を丸くし、ロップを見つめていた。

「そ、それは……本当なのか、ネザーランド曹長よ」

「は、はい。本当でございます」

「信じられん……籠城戦にならんとは」

「籠城戦どころか、戦すらしなくて良くなるとはな」

誰もがなぜか避けられた戦に安堵し、そして退魔師の異様な動きに戸惑っていた。

「だけど、どうして敵が……」

リクは顎に指をあて、考え込んだ。この辺りには、他に魔族が支配する主要都市は存在しない。敵は、間違いなく、カルカタに向かって進軍していたはずである。それがいったい、どうしてカルカタに向かってこないのだろうか。

「この先にあるのは、カルカタ平野。だけど、そこはただの平野。その先にあるのは、リュシオン山脈よね？　まさか、連中は山越えをするの？」

「でもよ、この山の向こうって……」

ヴルストがそう口にした時、リクの脳裏に衝撃が奔った。

「ロップ！　地図を持ってない？」

「ち、地図ですか？」

リクの命令で、ロップは懐に手を入れ、急いで地図を取り出した。リクは書類を払いのけ、机の上いっぱいに地図を広げる。カルカタ首脳陣が文句を叫ぶ声が聞こえたが、一切無視し、地図を喰らいつくように凝視する。

ロップが持っていたのは簡素な地図だったが、そこには知りたいことが記されてあった。

「リュシオン山脈を越えれば、ベリッカの街がある」

ベリッカは元・人間の王国最大の港町。貿易の要を魔族に押さえられ、王国の収入は減少した。人

間側にしてみれば、必ず奪い返したい拠点の一つだろう。
「いや、ベリッカを攻めるなら海からじゃね？　だって、あの山を越えるのは至難の業だ」
「はい、遠目からですけど、山越えの服装ではありませんでした。他の装備を見ても、とても山越えの準備をしているようには思えません」
ヴルストとロップが、山越えに否定的な意見を出す。たしかに、それは一理ある。それでは、どうして、カルカタを素通りしたのか。
「カルカタを滅ぼしてからの方が、後方を気にせずに安心して山越えできるのに」
「それでござる！」
アスティが叫んだ。妙案が浮かんだらしい。ぽんっと手を叩き、したり顔をしている。
「山に登る時は、隊列を一列にしないといけないでござるよな？」
「そうね、一列とまではいかないかもしれないけど、横に広がることは無理ね」
「ということは、後ろを叩きやすいでござるよ。ここを狙えば、反撃もしにくいでござる！」
アスティは地図を指さしながら話し始めた。彼女の発言に、カルカタ首脳陣が一気に色めき立つ。
クラウトは立ち上がると、拳を高く掲げた。
「そうだ！　いまこそ敵を討ち取る時だ！　だいたい、我らのカルカタを無視するとは何事だ！」
アスティの発言が、会議の風向きを変えた。

籠城戦に固執していた者たちの意見が、正反対に変わる。
「そうだ！　これは侮辱だ!!」
「すぐに出陣せよ！　戦じゃ!!」
カルカタ首脳陣の誰もが、戦支度を進めるべく、豚に関する書類を踏みつけながら、軍の配置について盛んに議論を始めた。
その中心にはアスティがいたが、一方のリクは、まだ地図を睨みつけていた。そんなリクを見て、ヴルストが声をかけてくる。
「嬢ちゃん、なにやってんだ!?　嬢ちゃんが待ち望んでた戦じゃねぇか！」
「なにか、おかしい気がするの」
こんな大っぴらに素通りしたら、カルカタが「侮辱された！」と血気盛んになることくらい、簡単に予想できそうだ。それなのに、素通りし、背中をこちらに見せてくるとは正気の沙汰ではない。ルーク・バルサックは、それすら想定できない色ボケなのだろうか。
「絶対に……理由がある」
「おい、バルサック少佐！　貴様も出陣の準備をせよ！」
ヴルストを押しのけ、クラウトが怒鳴り散らしながら命令してくる。
「これは、罠に違いありません。敵が簡単に隙を見せるとは到底思えない」

リクは地図に目を落としながら答える。ところが、その地図は、目の前で丸められてしまった。クラウトが取り上げてしまったのである。

顔を上げれば、彼の顔は怒りで赤く染まっていた。そこに数日前の冷静な領主はいない。あるのは、戦に必ず勝てる、功を上げると燃える初陣兵の顔だった。

「確かなのか？　違うのだろう？　ならば、攻める。自信がないならば、我らの後続に付き従うが良い」

これは、おかしい。

リクはクラウトから距離を取った。彼の目の輝きが異様すぎる。否、クラウト・ザワーだけではない。他のカルカタ首脳陣を始め、アスティの瞳も狂ったように輝いていた。

リクのように、退魔師に対する復讐心、という確実な狂気があれば理解できる輝き――だが、彼らは違う。この戦いに、先程まで、籠城戦に全面賛成していた彼らが狂気に奔る理由は見当たらない。

「ヴルスト少尉。これは……」

「あぁ……なんだ、これ？」

ヴルストも異様さに気づいているのだろう。彼の顔は青ざめていた。

クラウトたちは、まるで何者かに突き動かされるように動いているようだ。この狂気めいた輝きに、あれほど固執していた考えを変えた原因があるはず。クラウト・ザワーは曲がりなりにも、長年、カルカタを治めてきた領主だ。すぐに全軍出撃命令を出すほど、状況が読めない馬鹿ではない。

だが、その原因を考えている暇はなかった。

「ヴルスト、貴方は待機。なにかあったら、すぐにカルカタから撤退して、レーヴェン隊長かゴルトベルク中将のところへ報告に行ける準備だけは整えておいて。それから――」

リクは、ヴルストの耳元で耳打ちした。

たとえ罠だとしても、この出陣の勢いを止めることは不可能だ。籠城戦は嫌だったが、かといって罠に踏み込むのはもっと嫌だ。となれば、ここまで来たら全力を尽くすしかない。

「出陣せよ!!」

出撃命令が下ってから、一刻も経たないうちに準備は終わった。

クラウト率いる一万の兵は、鬨（とき）の声を上げながら城門を飛び出す。

目の前に広がる、輝かしい勝利に向けて。

第三話　カルカタ平野の戦い

「……って感じになるだろうね」
ルークは、くすりと笑う。
ライモンに「戦地へ赴け」と言われた時は不安でいっぱいだった胸が、心なしか少し軽くなっていた。
「素通りされた怒りに身を任せて、僕たちの後を追撃してくるんだ。どうして素通りしたのかなんてこと、まったく考慮しないでね」
カルカタ平野の戦いでは、祖父（ルドガーゴルトベルク）の弔（とむら）い合戦に燃える孫娘、アスティ・ゴルトベルクが筆頭となり、カルカタ領主率いる八千の軍勢がルークたちの背後に迫るのだ。復讐に燃える彼らが、素通りされて矜持（きょうじ）に傷がつかないわけがない。しかし、その展開、そして勝利方法はすでに、ゲームで知っていた（プレイ済み）。
「ははは、気分は武田信玄ってとこかな」
「タケダ、シンゲン？　なんですか、若様？」

マリーが不思議そうに小首をかしげる。彼女が日本の戦国武将など知るわけもないし、たとえ、教えたところで理解できないだろう。
「気にしないで、マリー」
だから、ルークは不敵に微笑む。そして、青空高くに手を上げた。
「反転せよ！　魚鱗（ぎょりん）の陣だ!!」
リュシオン山脈には登らず、カルカタ平野で陣を構える二万のバルサック軍。この軍勢で、餌（えさ）につられ、のこのこ城から出てきた八千の軍勢を迎え撃つのだ。
無論、ゲームとの差異をまったく考えなかったわけではない。
これまで、数多くのヒロインが死亡している。戦においても、ゲームとの乖離が起こる可能性は捨てきれない。だが、あくまで「可能性」だ。ゲーム通りに進め、問題が起きてから対処すれば良いだけのことだ。
「いけ、全軍！　突撃だ！」
この時、ルークは気づいていなかった。
否、知る由もなかった。
ゲームとの乖離はすでに起きていることを。
カルカタ軍の数に関する誤算と、かつて自分が捨てた姉が、敵方にいることを。

「な、山を登っていないだと!?」
カルカタ軍の誰かが、驚きの叫びを上げた。
退魔師たちは山を登っていない。それどころか、カルカタ平野に陣を構え、カルカタ軍を待ち伏せていたのだ。綺麗に整えられた三角形型の陣形が、こちらを向いていた。その底辺に当たる最奥には、ことさら巨大な旗が翻っている。おそらく、あそこに敵の大将がいるのだろう。
予定外の戦況に、カルカタ首脳陣は呆然と陣形を眺めることしかできない。その衝撃のあまり、指揮をとることもままならなかった。
「狼狽えるなでござる！」
彼らの代わりに声を発したのは、アスティ・ゴルトベルクだった。予想が外れたという驚きを隠し、巨大な槌を堂々と振り上げる。
「敵は正面から攻めてくる！　だから、自軍を羽のように広げて、挟み込むでござる！」
アスティは手を広げながら、これからとるべき陣形を命令した。
つまるところ、鶴翼の陣であった。だが、いくら陣を整えようとも、戦力差は歴然としている。この状況で剣をとっても、勝てる見込みはない。しかし、一度戦場に出てしまった以上、選択肢は「戦う」しか残されていないのだ。

「うむ、ではアスティ殿の言う通りにしよう。皆の者！　両翼を広げて敵を挟みこめ!!」
クラウトの声と共に、軍の形が変わる。
前方を走っていた領主は後方に下がり、後方に従軍していたリクたちが前方に出る。リクは敵前に翻る旗を一瞥し、ぺろりと舌をなめた。
「やっぱり……あの旗、間違いないわ」
敵軍の翻る旗、すべてがバルサック家の旗一色だ。恐らく、傘下の退魔師やら傭兵やらをかき集めて軍の形を成しているのだろう。退魔師の育成には金がかかる。一族すべてをかき集めたことを考慮に入れても、軍勢の半数も退魔師はいないはずだ。
もっとも、彼らはバルサックに味方した者であることには変わりない。
故に、目の前に広がる兵――その一人一人が、リクの敵だ。
「ごめんなさい。私、今日は手加減できそうにないの」
これだけ圧倒的な兵力の差がある以上、自分の目的を果たすためだけに手を抜き、討ち果ててしまったら意味がない。バルサックだからと特別扱いすることなく、均等に皆殺しだ。リクはハルバートを引き抜くと、自分に従う兵に向けて声を張り上げた。
「撤退の合図をするまで、思う存分に殺してあげなさい」
その言葉に同意するように、魔族兵の咆哮が平野に響き渡った。その声は全身の血を震わせ、戦

闘欲を掻き立てる。
この雄叫びが、戦の火ぶたを切るきっかけだった。
先に動いたのは、退魔師軍。巨大な波が襲い来るかのように陣が動き、自軍の半数ほどしかない軍勢とぶつかった。
こう記すと、魔族側はあっという間に波に呑み込まれそうだが、そう簡単にはいかない。リクは突貫してくる兵を睨みつけた。
「死に急いでいるなら、喜びなさい」
退魔師たちは、声を張り上げながら軍勢を崩そうとしてくる。彼らの最初の標的は、軍の最前線を駆ける赤髪の騎兵――すなわち、リクだ。彼らの突進に微笑みながら、リクは悠々とハルバートを右から左へ薙ぎ払った。
「私が直々に介錯してあげる」
あっという間に胴体が割れ、血飛沫が辺りに散った。他の魔族も己の剣や槍、あるいは爪や拳を振りかざし退魔師に襲いかかる。歩兵の首を刈り取り、騎兵は上から下へ裂いて、時には腹を薙ぎ払って内臓を引きずり出す。
それでも、リクには物足りない。今回の敵は、どれも等しくバルサックの退魔師なのだ。しかも、その向こう――最奥には、ルーク・バルサックが居座っている。その事実が、リクを内側から熱くさせた。
「あはは、どうしたの？　それが全力かしら？」
リクは狂ったように笑いながら、ハルバートを回した。返り血が白い顔に華やかな化粧を施し、赤い髪をさらに赤く濡らし、紅の鎧を濃く染めた。
何十人切り捨てただろうか。リクが時を忘れ、本能の赴くままにハルバートを振るっていると、傍から悲鳴に近い声が聞こえてきた。ちらり、と視線を向ければ、ロップが並走している。必死に足を動かしながら、リクの騎馬の半歩後ろを走っていた。
「しょ、少佐！　そろそろ撤退する頃合いです！　右から、陣形が崩れてきています!!」
それは、非常に切羽詰まった声だった。死体を跳び越えながら、こちらに必死な視線を向けている。
「そう、報告、ありがとう」
リクは目の前にいた退魔師の首を貫き、その息の根を止めると、長く息を吐いた。少々暴れ足りないが、潮時なら仕方ない。ハルバートに刺さった首を払い捨て、騎乗する馬を反転させた。
「これより、カルカタ城へ撤退を開始する!!」
リクの掛け声と同時に、意気揚々と攻めていた部隊が手のひらを返したかのように反転した。そしてまっすぐ、カルカタへの道を駆け抜ける。後続の隊も後に続いた。前線の隊が撤退を開始した

のだ。それに、誰も彼も死ぬのは惜しい。リクの部隊につられるように、カルカタへ向かって駆け出し始めた。

しかし――

「に、逃げるなでござる!! なんで戦わないでござるか!?」

一人だけ、逃げようとしない兵がいた。

アスティ・ゴルトベルクだ。巨大な槌を振るいながら、逃げる兵士に激怒する。

「くっ、逃げ腰でござるか！ なら、拙者一人だけでも、敵将の首を――！」

「いい加減にしなさい、アスティ・ゴルトベルク」

リクは舌打ちをすると、彼女の喉元にハルバートを突きつけた。味方に殺気を向けられたからだろうか、アスティの顔は青、そして白へと色が抜けていく。

「ど、どうしたのでござるか？ 乱心でござるか？」

「私は正常よ。数でも士気の高さでも負けてる。ここで、無駄に兵を消耗させるわけにはいかないわ」

「し、しかし……」

「これは、上官命令よ。今は引きなさい」

アスティの表情は、怒りから困惑に変わっていた。逆の立場ならば、理由を問いただしたいことだろう。しかしながら、今は話している時間も惜しい。リクはアスティを強引に従え、急いでカルカタ城へ引き返した。

蓋を開けてみれば、退魔師側の圧勝だった。

ルークは、軍の最奥で気分良く勝利に酔いしれていた。万が一に備えた策も用意していたが、まさかここまでゲーム通りに戦が進むとは思わなかった。

ここまでくれば、勝利したも同然だ。悠々と椅子に腰かけ、鎧を脱いでも構わないだろう。とはいえ、戦う心づもりがまったくないわけではない。

これから、アスティ・ゴルトベルクが捨て身の特攻をしかけてくることは知っていた。

ゲームでは、アスティだけが撤退を拒否し、単騎で襲いかかってくるのだ。この展開を知らず、勝利に喜んでいると、アスティの決死の一撃を喰らい、バッドエンドになってしまう。だから、ルークは剣を引き抜き応戦できるよう、しっかり準備していた。

「敵は敗走を始めました。いかがいたします？」

マリーが静かに尋ねてきた。ルークは、やれやれと首を横に振りながら立ち上がる。

「これだけで敗走するなんて、気概がないな……誰かいないの？ 命を賭してでも襲いかかってくる魔族は？」

「いませんね。全軍全魔族が引きかえしていきます」
「そうだよね……えっ？」
ルークは首を捻った。
「単騎でもいないの？」
「はい。追撃しますか？」
これは、ゲームと異なる展開だ。
ルークは一瞬、理由を考えたが、気に留めないことにした。よく考えてみれば、セレスティーナが戦死してしまったため、ルドガー・ゴルトベルクは死んでいない。故に、アスティも退魔師に対する復讐心を抱かなかったのだろう。ルークはそう考えると、馬にまたがった。
「よし、それなら追撃だ！」
「はい！　皆の者、追撃しなさい!!」
愛剣を掲げ、マリーと一緒に馬を走らせる。
ルークたち退魔師軍は、我先にと撤退する魔族の背中を追う。だが、撤退を始めた時期が、ゲームより少し早かったせいだろう。魔族たちはそこまで疲弊しておらず、あっという間に丘を駆けあがり、城門をくぐり抜けていくのが見えた。
「ん？」

立ち読みサンプルはここまで

その時、ルークはもう一つ、妙なことに気がついた。
城門の辺りに、なにかが並んでいる。五百ほどの魔族兵が、一人一人、なにか動物らしきものを押さえつけているのだ。
目を凝らせば、それは良く肥えた豚だった。肌に液体を塗っているのか、遠目から見ても、太陽の光に反射し、テカテカと光っている。
これは、ゲームに存在しない展開だ。しかし、そのことを悩むより先に、前世で蓄えた雑学が警報を鳴らした。
液体塗れの豚を大量に待機させ、魔族兵は全員丘の上にそびえる城内へ逃げ込んでいる。そして、その下に迫るは自分たち――退魔師の軍勢が密集している。となれば、思い至る戦略は一つだ。
「やばい！　全員、とにかく逃げろ!!　引き返せ!!」
「なぜですか、若様？」
マリーが聞き返した時には、すでに手遅れだった。
油を塗りたくった豚に火がつけられる。それと同時に、魔族たちは豚を手放し、丸々と太った尻を思いっきり叩いた。
瞬く間に火達磨になった豚は、尻を叩かれ坂を駆け下りる。
一般的に、豚は美味しく頂く食料である。